『杜牧詩選』譯注例釋

――凡例・譯注・傳本――

植木久行

序

筆者は現在、晩唐の著名な詩人杜牧（八〇三～八五二）に關する譯注書『杜牧詩選』（岩波書店・岩波文庫）――故・松浦友久先生との共著――を執筆中である。本稿は、その中に收める①凡例、②譯注（一首）、③『杜牧集』の主要な傳本（「解說」の條に收める一項目）の三種を、松浦先生ゆかりのこの研究誌に發表して、學恩の記念としたい。

『杜牧詩選』は、今日傳存する『杜牧集』の主要な傳本――『樊川文集』『樊川外集』『樊川別集』の三集に收める約四一五首の詩（誤入詩を除く）のなかから、一二九首を嚴選し、「清明」「薔薇花」の二首を加えたものを、主題別に懷古・詠史・行旅・鄉思・閨情・贈答・飲酒・閑適・登覽・離別・詠物・書懷の、十二の類別（ジャンル）に分けて譯注を施すものである。さらに「阿房宮賦」一首の譯注を加えて、優れた古典詩人の、「惆悵」たる豊かな抒情世界を生き生きと傳えることを目的とする。

松浦先生とは生前、本書に收めるべき詩賦の選擇と主題別分類をともに檢討し、先生みずから卷頭の「懷古のうた」を飾る「江南春絕句」「揚州」二首の譯注を書かれて、據るべき規範を示された。そして先生は現代語譯、筆者は注釋、という役割分擔を決めてほどない二〇〇二年九月二十六日、突如逝去されたのである。先生の適切・正確な現代語譯と優れた解說（先生は詩風の解說、筆者は傳記の擔當）を讀む樂しみが永遠に失われたのは、痛恨の極みである。分擔執筆を擔う筆者にとって、すでに選錄詩の分類を終えていたこと、三首の

詩の譯注の範例が遺稿として殘されたことは、不幸中の幸いであった。かくして先生の名著『李白詩選』（岩波文庫、一九九七年）の體例に卽して執筆する方針が確立したのである。今ここに『杜牧詩選』に收める三種の原案を發表して、早期の刊行を實現したい。

凡例

一、本書は、杜牧の主要な作品一三二首を選び、訓讀・語釋・現代語譯・補注・解說・年表などを加えたものである。

一、底本には、四部叢刊初編集部に收める明後期刊翻宋本の影印『樊川文集』［本集・文集］、および當該書に付載する『樊川外集』［外集］『樊川別集』［別集］を用いた。これを底本に用いたものに、陳允吉校點本（上海古籍出版社、一九七八年）や歐陽灼校點本（岳麓書社、二〇〇一年）がある。本書の校勘には、①南宋期の注釋者未詳『樊川文集夾注』（中國遼寧省圖書館藏・明正統五年朝鮮刻本の影印本、日本國立公文書館［內閣文庫］藏・無刊記朝鮮刻本の寫眞複製本）、②明萬曆四十六年刊『杜牧集』［牧集］（臺灣聯經出版事業公司影印『全唐詩稿本』第五十三冊、杜牧の條に用いられた版本。外集・別集を含む）、③明末・胡震亨『唐音統籤』（戊籤一、北京故宮博物院圖書館藏・上海古籍出版社・二〇〇三年の影印本、國立公文書館所藏本）、④『全唐詩』（中華書局・一九七九年再版排印本）、⑤清・馮集梧『樊川詩集注』［馮本・馮注］（上海古籍出版社・一九七八年再版排印本）のほか、唐宋期の總集、⑥晚唐・韋莊編『又玄集』、⑦五代（後蜀）・韋穀編『才調集』（ともに傅璇琮編『唐人選唐詩新編』［陝西人民出版社・一九九六年］所收排印本）、⑧北宋初期の『文苑英華』［英華］（中華書局・一九八二年再版影印本）、⑨南宋・周弼編『三體詩』（元の天隱注・季昌增注『三體詩』［富山房・漢文大系、一九一〇年排印本］）等を用い、校勘の當該箇所については、「語釋」の部分に注記した。ただし、詩歌の理解を助けるものに限定し、明白な誤字や脫字、簡略化された詩題、異體字の異同（「煙と烟」「憐と怜」「階と堦」等）に關しては、煩雜を恐れて必ずしも一々言及しない。

一、本書を利用する便宜のため、各作品ごとに底本（本集・外集・別集）に收める卷數を、「韻字」の後に（　）を付して、詩型とともに書き記した。例（七言絕句、本集卷四）。一個人の別集構成を持つ『夾注』『牧集』『全唐詩』『馮本』中の作品の排列は、底本のそれと基本的に同じであ

るが、『唐音統籤』のみは詩型別編成のため、排列を大きく異にする。當該書の重要な異文を記すとき、卷數を特に明示するのは、このためである。

一、漢字については、原題・原文は舊漢字、その他は原則として新漢字を用いた。ただし、「余・餘」「欠・缺」など、誤讀の恐れのある場合は、適宜、舊漢字を用いている。

一、かなづかいは、訓讀文を含め、原則としてすべて新かなづかいによる。ただし、「出ず（出ず・出づ）」など、誤讀の恐れのある場合は、適宜、舊かなづかいを併用している。

譯　注（一首）

鄭瓘協律　　鄭瓘協律

廣文遺韻留樗散　廣文の遺韻　樗散を留め
鷄犬圖書共一船　鷄犬　圖書　共に一船
自說江湖不歸事　自ら說く　江湖より歸らざるの事
阻風中酒過年年　風に阻まれ酒に中りて　年年を過ぐと

もと協律郎の鄭瓘

あなたは、鄭虔先生ゆずりの、偉大なウドの大木の氣質を深く留めなさり、
鷄や犬の家畜も、書物も、すべて一艘の船の中に積み込んで氣ままに暮らしている。
久しく江湖の間を漂泊して歸ろうとしない事由を、みずから言い譯していう。
逆風にはばまれ、酒に醉いつぶれているうちに、一年また一年が過ぎていったのだ、と。

○鄭瓘協律―協律は太常寺協律郎。音律の調和をつかさどる官（正八品上）。鄭瓘の事跡は不明。『夾注』に「本注（原注）、廣文の孫子」とあり、『增注三體詩』卷一にも「瓘は乃ち虔の孫」という。『夾注』の「本注」は底本のなかには見えないが、明代（十五世紀半ば）に初修された『臺臨康谷鄭氏宗譜上中下世傳』卷三によれば、鄭瓘は鄭虔の玄孫（虔―彧―策―瓘）であり、[1] これは「孫子」（子孫の意）と符合する。しばらくこの玄孫說に從う。明・張之象編『唐詩類苑』卷九七には、「鄭瓘協律に贈る」と題する。○廣文――廣文館博士鄭虔のこと。鄭虔、字は若齊。天寶年間の初め（七四二年ごろ）、協律郎となる。（『新唐書』

卷二〇二、文藝傳中）。天寶九載（七五〇）、國子監のなかに廣文館が設置されると、左遷の地から呼びもどされて、その博士となる。杜甫と交遊し、玄宗から「三絶」（詩・書・畫妙絶）と評された（六八五？～七六四）。晩唐の張彥遠『歷代名畫記』卷九にいう、「鄭虔は高士なり。…飢窮・轗軻（極度の貧困と不遇）にありても、琴酒・篇詠を好む」と。

○遺韻――遺傳された氣質・氣風。○樗散―役立たずの大木。樗はヌルデ、ゴンズイ。節やこぶが多く、枝も曲がりくねって、木材としての使い道がなかった。また散は散木（役に立たない木）の櫟。櫟は舟を造れば沈み、棺を作れば早く腐り、器を作れば壊れやすく、柱を作れば蟲が食った。（『莊子』逍遙遊・人間世篇）。ここは、杜甫の「鄭十八虔の臺州（浙江省）の司戸（參軍）に貶せらるるを送る。…」詩に見える、「鄭公は樗散にして　鬢　絲を成す」を踏まえた表現。このため本來「ウドの大木」（役立たずの人間）を意味する「樗散」の語が、ここではかえって一種の反語表現として、不遇や貧困に屈託せず、俗塵を離れて自由な境涯を送る鄭瓘の生き方に對する共感が漂う。ちなみに、「樗散」の字、底本・『夾注』・『牧集』には、「攄散」に誤る。ここでは『三體詩』・『唐音統籤』（卷五六一）等に從う。

○江湖――名利の帝都（廟堂）から遠く離れた南方の江。と湖。自由を樂しむ隱士たちが悠々自適する空閒である。おそらく鄭瓘は、すでに協律郎の官をやめており、氣ままな生活を樂しんで再び歸朝する意志のないことをいう。○不歸事――事は事由・原因。○阻風―逆風に邪魔される。江水・世閒雙方の風波を兼ねた表現。ちなみに「阻風中酒過年年」の語は、晩唐・五代の韋莊「篷船に宿る」詩の結句にも見える。本詩の影響か。○中酒――酒に醉う、酒に醉いつぶれる。この「中」は去聲、zhòng。結句は鄭瓘の高士ぶりを描寫する。

※韻字――船・年（七言絶句、本集卷四）。

［補注］

（1）王晩霞主編『鄭虔研究』（浙江古籍出版社、一九九〇年）に引く宗譜の摘錄による。鄭瓘の字は「瑩之」と傳える。また鄭瓘の事跡は、王晩霞主編『鄭虔研究續集』（浙江古籍出版社、一九九三年）に收める金祖明「唐協律郎鄭瓘故里考古」に引く『鄭氏宗譜』等參照。

（2）植木久行「唐代作家新疑年錄（八）」（弘前大學人文學部『文經論叢』第三十卷第三號、一九九五年所收）に收める鄭虔の條參照。

『杜牧集』の主要な傳本

杜牧の甥（杜牧の姉が嫁いだ裴儔の子）にあたる裴延翰は、杜牧の死（大中六年十二月ごろ）[1]後、ほどなく生前の委囑に從って、『樊川集』二十卷（前の四卷が詩［賦を含む］、後の十六卷は文）を編纂し、大中九年（八五五）ごろ、[2]後序を書き終えて完成させた。都長安の東南郊外にある京兆府藍田縣尉・集賢殿校理在任中のことであった。これが、今日傳存する杜牧の詩文集の祖本となる。その後、唐末?、編者未詳『樊川外集』一卷（詩のみ）が編纂され、續いて北宋の熙寧六年（一〇七三）の自序を有する田槩編『樊川別集』一卷（詩のみ）が編纂された。かくして『杜牧集』の根幹を成す三種の傳本が全てそろうことになる。ちなみに南宋前期には、さらに編者未詳『樊川續別集』三卷が出現したが、大半の詩は杜牧の友人許渾の詩であった。『全唐詩』卷五二六、杜牧七の條に收める六十二首は、この『續別集』の殘本中の詩らしい。[3]

今日一般に杜牧最良の傳本とされるテキストは、四部叢刊初編に收める『樊川文集』二十卷とそれに付載された『樊川外集』一卷『樊川別集』一卷である。この版本は、早くとも明の正德・嘉靖年間（十六世紀前中期）以後に刊行された翻宋本らしい。[4]いわゆる楊氏景蘇園影宋刊本（清・光緒三十二年［一九〇六］楊壽昌刊）や宮內廳書陵部藏・明倣宋刊本は、いずれもこの四部叢刊本と同一の明版であった。[5]

また明末・清初の錢謙益・季振宜遞輯『全唐詩稿本』[6]第五十三冊、杜牧の條に收める刊本『杜牧集』[7]は、明・朱之蕃編『晚唐十二家詩集』（萬曆四十六年［一六一八］刻本）に收める『樊川詩集』『樊川外集』らしい。[8]この『樊川詩集』は、『樊川文集』に收める前四卷の詩を收めたものであり、本來の形態が殘されている。

他方、明の永樂十四年（一四一六）の刊記を持つ朝鮮刻本『樊川文集夾注』四卷（『樊川外集夾注』一卷を付載）が傳存する。[9]この『夾注』本には、さらに明・正統五年（一四四〇）刊本・無刊記本の二種も傳わっており、いずれも朝鮮古刊本である。『夾注』本は、『別集』を缺く宋代流布の一形態（晁公武・陳振孫の著錄本參照）を傳えており、卷頭の賦三首も含まれている。南宋の中後期（十三世紀前半）に成立し、注釋者は不明ながら南宋期の中國人らしい。

『夾注』本は、今日傳存する『杜牧集』の版本として最も古いだけでなく、現存最古の注釋書として、初め日本で近年中國[10][11]でも注目され始めた。明・正統刊本（遼寧省圖書館藏）

が近年（一九九七年）影印[12]されて、きわめて利用しやすくなった。『夾注』本の存在は、杜牧の詩（以下、杜詩と略稱）に對して詳注を施した『樊川詩集注』（清・嘉慶六年［一八〇一］刊）の著者馮集梧でさえ、全く氣づかなかった稀覯本である。いいかえれば、『夾注』は明清期ほとんど未知のテキストであった。從って校勘資料としての價値は極めて高く、本書では、校勘と注釋の雙方で利用した。ちなみに詩の排列は、四部叢刊本とほぼ同じである。

ところで明刊翻宋本『樊川文集』二十卷（特に前四卷の詩の部分）は、晩唐の裴延翰編纂時の舊態をかなりよく保存していようが、改變された部分も存在する。①本來の書名は『樊川集』であって、『樊川文集』ではない。この點は、『舊唐書』卷一四七・杜牧傳、『新唐書』卷六〇・藝文志、南宋の晁公武（ちょうこうぶ）『郡齋讀書志』（瞿（く）本）卷十八、陳振孫『直齋書錄解題』卷十六を見れば、明白である。②北宋の田概編『樊川別集』の自序によれば、裴延翰編『樊川集』中には、「古律詩二百四十九首」が存在した。しかし明刊翻宋本『樊川文集』に收める詩數は二六七首（卷四に收める唱和詩の相手、殷潛之・邢群の詩各一首を除く）であり、十八首も多く混入している。

③『樊川文集』の卷頭を飾る裴延翰「樊川文集序」は本來、卷末に付された「後序」であった。しかし卷頭の序文が散逸したため、作品集としての體裁を整えるために卷頭に置かれることになり、文脈上不適切な末尾の部分が削除された。北宋・姚鉉（ようげん）『唐文粹』卷九三（四部叢刊本）、『全唐文』卷七五九に收める「樊川文集後序」が、その舊態を傳えている。削除部分によれば、『樊川集』の卷頭には本來、叔（おじ）父の中書侍郎裴休（裴延翰の父、裴儔の弟）の序文が置かれていた。

明刊翻宋本『樊川文集』には、こうした問題點が存在するが、その中に收める詩文は、ほぼ杜牧の作と考えてよいだろう。（卷四所收の「江上偶見絕句」は、劉禹錫詩の混入である）。

『樊川外集』と『樊川別集』に收める詩に關しては、杜牧の作かどうかを見きわめて、より愼重に對處しなければならない。『外集』に收める詩一二七首のうち、すでに二十五首ほどは、杜牧以外の僞詩であり、『別集』に收める詩六十首のうち十二首ほどは僞詩である、と考證[13]されている。

編者未詳『樊川外集』の成立年代は、今日なお明瞭でない。現存の『外集』に收める一二七首は、田概の「別集序」に見える「舊傳の『集外詩』なる者は、又た九十五首」と大きく異なっている。晩唐の詩人皮日休「進士嚴子重（名は惲）を

傷む詩」（咸通十一年［八七〇］の作）の序によれば、彼が幼少年時代、鄉校で見た『杜舍人牧之集』（中書舍人杜牧［字牧之］の作品集）にあった「進士嚴惲に與うる詩」は、現行の『外集』に收める「嚴惲秀才の落花に和す」詩のことらしい。さらに五代（後蜀）・韋穀編『才調集』卷四には、『外集』に收める三首「隋苑」（定子）「月」「遣懷」（題揚州）が一緒にまとめて收錄されていることをも考えれば、[14]『外集』は唐末に成立した可能性が高い。[15]しかし現行の『外集』は、すでに當時の舊態をかなり失っている。[16]

いずれにしても現存の『杜牧集』の傳本は、『夾注』本も含めて、明刊本が最古であり、それ以上は遡れない。しかもテキストは少し亂れており、誤收・妄增詩が含まれている。このため杜詩を適切・正確に讀んでいくためには、唐宋期の總集のなかに收める杜詩の文字に對しても、當然注目する必要がある。この意味で唐末の『又玄集』（光化三年［九〇〇］自序）と五代の『才調集』、および北宋初期の雍熙三年（九八六）に成る『文苑英華』は、特に重要となろう。この三書を採りあげて校勘に利用したゆえんである。

杜詩の注釋書としては、すでに述べたように、南宋の注釋者未詳『樊川文集夾注』（『外集夾注』一卷を含む）が存在する。續いて清の馮集梧『樊川詩集注』（嘉慶三年［一七九八］自序）が出現し、古典詩に對する優れた注釋書の一つに數えられているが、『外集』や『別集』の作品に對しては注釋を施さない。

近現代になって刊行された杜詩の注釋書のなかで、本書の譯注に利用した主なものをあげておきたい。（研究書・評傳の類は省く）。

【中國】

①繆鉞『杜牧詩選』（人民文學出版社、一九五七年。再版あり）

②周錫韓『杜牧詩選』（生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八〇年。また廣東人民出版社、一九八四年版もある）

③朱碧蓮・王淑均『杜牧詩文選注』（上海古籍出版社、一九八二年）

④朱碧蓮『杜牧選集』（上海古籍出版社、一九九五年）

⑤吳在慶『杜牧詩文選評』（上海古籍出版社、二〇〇二年）

⑥張松輝譯注・陳全德校閱『新譯杜牧詩文集』（上下二冊、臺灣三民書局、二〇〇二年）

【日本】

①上村才六『杜樊川絕句詳解』（聲教社、一九三三年）

②市野澤寅雄『杜牧』（集英社、一九六五年）
③荒井健『杜牧』（筑摩書房、一九七四年）
④石川忠久『ＮＨＫ漢詩をよむ　杜牧』（日本放送出版協會、一九九一年）

中國版の①②④は、選錄した詩歌を編年部分と未編年部分とに分けて注釋するが、特に②は優れた口語譯を備えている。④は注釋が詳しい。③は平易・明解な注釋書。⑤は編年體形式の簡略な評注書である。⑥は『樊川文集』二十卷のうちの十六卷までの全作品と卷十七以下の「制」六篇、および『文集』未收の詩三十一首の譯注である。つまり⑥は、譯注を施した分量の多さで畫期的な勞作であるが、詩歌の譯注について言えば、必ずしも綿密ではない。

日本版の①は、『馮本』所收の絕句一五六首の譯注である。②は日本における最初の大部の譯注書であるが、煩雜で分かりにくい。③のなかに收める約三十首の杜詩の譯注は、現在でも參照に値する。④はラジオ第二放送のテキストであり、平明な評釋を特色とする。

ちなみに陳貽焮（ちんいきん）主編『增訂注釋全唐詩』（全五冊、文化藝術出版社、二〇〇一年）の簡潔な注釋（吳在慶執筆）も、充分參考になる。

『杜牧詩選』譯注例釋（植木）

注

（1）植木久行「杜牧生卒年論據考――許渾らの沒年にも觸れて」（『集刊東洋學』第六十八號、一九九二年所收）參照。

（2）胡可先「杜牧詩文雜考」（同『杜牧研究叢稿』人民文學出版社、一九九三年所收）や、吳在慶「杜牧卒年及『杜秋娘詩』系年考辨」（同『杜牧論稿』廈門（アモイ）大學出版社、一九九一年所收）參照。

（3）葛兆光「唐集瑣記」（『文獻』第二十二輯、一九八四年所收）や、この說を受けて探求した胡可先『杜牧研究叢稿』六六頁と二二五頁を參照。『全唐詩』卷五二六は、『全唐詩稿本』のなかで『別集』の後に付載されたテキストに基づく。

（4）韓錫鐸（かんしやくたく）「關于『樊川文集夾注』」（『遼寧大學學報』［哲學社會科學版］一九八四年第四期所收）による。

（5）山內春夫「杜牧集の版本について」（同『杜牧の研究』彙文堂書店、一九八五年所收）の說による。

（6）明淸未刊稿彙編第二輯として、一九七六年に影印された。『全唐詩稿本』の原名は、『唐詩』もしくは『全唐詩』。

（7）『杜牧集』の名は、『稿本』所收のテキストの版心による。『文集』『外集』『別集』の詩を、すべて「卷之五」として收める。

（8）賈二强「『全唐詩稿本』採用唐集考略」（陝西師範大學古籍所編『古代文獻研究集林』第三集、陝西師大出版社、一九九

五年所收）の説による。この論文に『樊川別集』の名を記さないのは、單なるケアレスミスか。賈二强の論文の閲讀に關しては、上海の復旦大學に留學中の佐藤浩一氏の手を煩わせた。ここに記して深く感謝したい。

（9）許山秀樹「『樊川文集夾注』の成立と版本」（早稲田大學『中國文學研究』第二十期、一九九四年所收）の説による。この論文は、『夾注』に關する知見を大きく前進させた勞作である。これによれば、最古の永樂刊本の足本は、お茶の水圖書館成簀堂文庫所藏本だけであるという。

（10）市野澤寅雄『杜牧』（一九六五年）や荒井健『杜牧』（一九七四年）は、杜詩の最古の注釋書として活用する。

（11）注4の韓錫鐸の論文や、吳在慶「朝鮮刻本『樊川文集夾注』的文獻價値」（『唐代文學研究』第九輯、廣西大學出版社、二〇〇二年所收）参照。

（12）『朝鮮刻本樊川文集夾注』（中華全國圖書館文獻縮微複製中心、發行者は新華書店北京發行所）。

（13）胡可先「杜牧詩眞僞考」（同『杜牧研究叢稿』所收）は、先行の研究成果をまとめた記述を持ち、参照に値する。ただし「懷吳中馮秀才」詩については、筆者は杜牧の詩と見なす。佟培基『全唐詩重出誤收考』（陝西人民出版社、一九九六年）も参照。

（14）胡可先「杜牧詩文雜考」（注2）のなかでの指摘。

（15）古くは明末・胡震亨『唐音統籤』卷五五三（戊籤一）、杜牧小傳の注にいう、「其の外集の詩は、唐人の編む所にして、其（杜牧）の焚棄を更るの余り」と。

（16）胡可先「杜牧詩文雜考」（注2）には、こう推測する、――現行の『樊川外集』は、後の人が唐代成立の『外集』と『集外詩』一卷（陳振孫『直齋書錄解題』卷十六に見える）あるいは他集とを混合・刪削して作り上げたもの、と。